

- 1 . それから、八日目になって、
モーセはアロンとその子ら、
およびイスラエルの長老たちを呼び寄せ、
- 2 . アロンに言った。
「あなたは、子牛、すなわち、若い牛を罪のためのいけにえとして、
雄羊を全焼のいけにえとして、それもまた傷のないものを取って、主の前にささげなさい。
- 3 . あなたはまた、イスラエル人に告げて言わなければならない。
あなたがたは、雄やぎを罪のためのいけにえとして、
また、一歳の傷のない子牛と子羊とを全焼のいけにえとして取りなさい。
- 4 . また主へのいけにえとして、
和解のいけにえのための雄牛と雄羊を、また、油を混ぜた穀物のささげ物を、取りなさい。
それは、きょう主があなたがたに現われるからである。」 : פִּי הַיּוֹם יְהוָה נִרְאָה אֵלֵיכֶם
Ni. pf.
- 5 . そこで彼らは、モーセが命じたものを会見の天幕の前に持って来て、全会衆が近づき、主の前に立った。
- 6 . モーセは言った。
「これは、あなたがたが行なうように主が命じられたことである。
こうして主の栄光があなたがたに現われるためである。」 : וִירָא אֵלֵיכֶם כְּבוֹד יְהוָה:
Ni. impf.
- 7 . それから、モーセはアロンに言った。
「祭壇に近づきなさい。
あなたの罪のためのいけにえと全焼のいけにえをささげ、
あなた自身のため、またこの民のために贖いをしなさい。
また民のささげ物をささげ、主が命じられたとおりに、彼らのために贖いをしなさい。」
- 8 . そこで、アロンは祭壇に近づき、自分のために罪のためのいけにえの子牛をほふった。
- 9 . アロンの子らは、その血を彼に差し出し、彼は指をその血に浸し、祭壇の角に塗った。
彼はその血を祭壇の土台に注いだ。
- 10 . 彼は罪のためのいけにえからの脂肪と腎臓と肝臓の小葉を祭壇の上で焼いて煙にした。
主がモーセに命じられたとおりにである。
- 11 . しかし、その肉と、その皮は宿営の外で火で焼いた。
- 12 . それから、アロンは全焼のいけにえをほふり、
アロンの子らが、その血を彼に渡すと、彼はそれを祭壇の回りに注ぎかけた。
- 13 . また、
彼らが全焼のいけにえの部分に切り分けたものとその頭とを彼に渡すと、彼はそれらを祭壇の上で焼いて煙にした。
- 14 . それから、内臓と足を洗い、全焼のいけにえといっしょにこれを祭壇の上で焼いて煙にした。
- 15 . 次に、彼は民のささげ物をささげ、

民のための罪のためのいけにえとしてやぎを取り、ほふって、先と同様に、これを罪のためのいけにえとした。

16. それから、彼は全焼のいけにえをささげ、規定のとおりそうした。

17. 次に、彼は穀物のささげ物をささげ、

そのうちのいくらかを手のひらいっぱいに取り、朝の全焼のいけにえと別に、祭壇の上で焼いて煙にした。

18. ついで、彼は民のための和解のいけにえの牛と雄羊とをほふり、

アロンの子らがその血を渡すと、彼はそれを祭壇の回りに注ぎかけた。

19. その牛と雄羊の脂肪の部分、

すなわちあぶら尾、内臓をおおう脂肪、腎臓、肝臓の小葉、

20. これらの脂肪を彼らが胸の上に置くと、彼はその脂肪を祭壇の上で焼いて煙にした。

21. しかし、胸と右のももは、アロンが、モーセの命じたとおりに奉獻物として主に向かって揺り動かした。

22. それから、アロンは民に向かって両手を上げ、彼らを祝福し、

罪のためのいけにえ、全焼のいけにえ、和解のいけにえをささげてから降りて来た。

23. ついでモーセとアロンは会見の天幕にはいり、それから出て来ると、民を祝福した。

すると

主の栄光が民全体に現われ、

24. 主の前から火が出て来て、

祭壇の上の全焼のいけにえと脂肪とを焼き尽くしたので、民はみな、これを見て、叫び、ひれ伏した。

וַיֵּצְאוּ וַיְבָרְכוּ אֶת־הָעָם

Piel.impf. Qal.impf.

come out

וַיִּבֶן מֹשֶׁה וְאַהֲרֹן אֶל־אֹהֶל מוֹעֵד

Qal.impf.

וַיִּבֶן כְּבוֹד־יְהוָה אֶל־כָּל־הָעָם:

Ni. impf.

説教

8章で一週間にわたる任職式を済ませた大祭司アロンとその子らは、9章に於いていよいよ最初の仕事に取りかかります。

モーセは、アロンとその子ら、長老たちを呼び寄せます。

そして、アロン自身のためには、

「罪のためのいけにえ」と「全焼のいけにえ」をささげることを命じます(2,7-14)。

さらに、イスラエルの民のためには、

同じく「罪のためのいけにえ」と「全焼のいけにえ」、

それに加えて「穀物のささげ物」と「和解のいけにえ」をささげるよう命じます(3-4,15-21)。

そして、その理由を「それは、今日主があなたがたに現れるからである」(4)と言います。

「こうして主の栄光があなたがたに現れるためである。」(6)

神さまの栄光は神さまが御臨在なさるところに現れます。

神さまがおられるところ、そこには必ず神さまの栄光が現れます。

祭司のため民たちのためにこれらのいけにえをささげる時に、

幕屋が神さまの臨在の現れるところとなり、神と人との交わりが回復するのです。

「罪のためのいけにえ」とは、

祭司と聖所の罪を贖ってきよめるためのいけにえです。

祭司自身がそのいけにえの上に手を置いて、自分の身代わりに殺されるものとして自分の手で屠ります。

そして、神の顕れる場所である聖所の祭壇の角に血を塗ります。

この祭壇の「角」というのは、祭壇の中で一番聖なる部分とされていました。

そこで神さまの御臨在の栄光があらわされるのです。

そこにいけにえの血を塗るということは、要するにそれら聖なる部分の汚れを洗い清めることを意味します。

元来「聖所」とは、文字通り「聖い所」つまり「神さまの所有しておられる所」でした。

神さまのものなのです。

地上にあるけれども、そこは神さまの側に存在している、天国の出張所、それが「会見の天幕」、「聖所」でありました。

でも、その「聖所」は、人が罪を犯す時に汚れてしまいます。

そうなると聖所は神さまのものではなくなります。

神さまがもう御臨在なさらない、言わば神さまに見捨てられた所になってしまうのです。

そうなれば、人はもはや神さまと交流することができなくなり、

神に見捨てられてそのままでは永遠に神と断絶して滅びに至ります。

それでは、一体どうすればいいのでしょうか。

罪を犯した人間は、一体どうすれば神さまとの交わりを回復することができるのでしょうか。

そのためには、ただ一つの道しかありません。

それが罪を犯した者が、神の怒りを受けて、滅びる、という道です。

でも、そうなれば当然人は生きてはいられません。

そこで、身代わりのいけにえが必要となります。

身代わりのいけにえの血が流され、つまり殺されて、

その殺された血を注ぎ、振りかけることで、罪の清算がなされるのです。

身代わりのいけにえによる罪の贖いがなされます。

そうして、聖所は再びきよさを取り戻して、

「聖なる所」、すなわち神さまの臨在をあらわす所となり、神さまとの交わりが回復するようになるのでした。

次に、「全焼のいけにえ」が捧げられます。

「全焼のいけにえ **עֹלָה** オーラー」とは「立ち上る」の意味です。

それは、すべて焼かれて煙になって神のもとに「立ち上る」ということを意味します。

これは神さまへの全き献身を意味します。

本来、私たちは、自らの罪の故に神のさばきを受けて完全に怒りの炎によって焼き尽くされて然るべきところでした。

でも、身代わりのいけにえによって滅びを免れることができました。

それで、救われた自分の全生涯を神さまのために献げ尽くすと告白することが「全焼のいけにえ」の意味です。

ここで祭司のためのいけにえは終わります。

そして、さらに、

イスラエルの民のためには

「罪のためのいけにえ」と「全焼のいけにえ」に加えて、

「穀物のささげ物」と「和解のいけにえ」がささげられます。

「穀物のささげ物 (**מִנְחָה** ミンハー) は「贈り物」という意味です。

それは、

日毎の糧を与えて生かしてくださっている神さまに、喜びと感謝をもって自分の労働の実を聖別してささげるものです。

つまり、イスラエルの民は、

「全焼のいけにえ」をささげることで、自分の全人生を神さまにささげることを告白し、

「穀物のささげ物」をささげることで、さらに具体的に自分の労働の実を聖別し、「飲み食い」という

人間にとって最も根本的な営みに至るまでを聖別して、具体的に神さまの栄光のために生きることを告白したのでした。

祭司の場合には、「穀物のささげ物」をささげるよう言われていません。

でも、その代わりに耳たぶと右手の親指と右足の親指に血を塗りました(8:23,24)。

つまり、
神に仕える祭司は、
みことばを聞く「耳」と
神さまに仕え従う「手足」を聖別して、神さまにささげ、
一般の人は、
自分の労働の実である「穀物」を聖別して、神さまにささげたのです。

「和解のいけにえ (קָרְבַּן שְׁלָמִים シェラミーム・コルバノ)」は「平和のささげ物」とも訳されます。
これは神と人との完全な平和を味わうものです。
このいけにえの最大の特徴は、
最も大切な部分とされた脂肪を焼いて神さまに捧げた後に、残りの肉を祭司と奉獻者が一緒に食べるということです。

奉獻者はまずささげ物の頭の上に手を置いて自分の手でそれを屠ります。
祭司はその血を祭壇の回りに注ぎます。
それから奉獻者はいけにえを切り分け、
そのうち脂肪と腎臓、肝臓の上の小葉(これも脂肪と思われる)とを祭司が祭壇で焼いて煙にすることで神さまにささげます。

この煙にしたささげ物は、神の「食物 = לֶחֶם レヘム：食物、パン」と呼ばれて、
あたかも神さまがささげ物のうち最高の部分である脂肪を召し上がっていることが意味されます。
そうして、脂肪と腎臓を取り除いた残りの部分のうち、
胸とももとは祭司が食べ、あとはすべて奉獻者がささげたその所でその日のうちに食べました。
つまり、わかりやすく言うと、ご馳走である肉を食べながら楽しく宴会したのです。
ささげるのが牛の場合には、すき焼きやカルビ焼きにして、
羊の場合には、ジンギスカンにして、
やぎの場合には、ヤギ鍋(ヒージャー)にして、そうやってみんなで鍋を囲んでおいしく食べたのです。
このように、「和解のいけにえ」とは、要するに神と人々が共に飲み食いするいけにえの儀式です。
神さまが最も最上の部分を食べ、残りの肉を人々が食べて、
そうやって神と人々が共に和やかに食事をする、それが「和解のいけにえ」なのでした。

この「和解のいけにえ」は、一連のいけにえの最後、クライマックスと言えます。
「和解のいけにえ」をささげてそれを食べることで、
自分が本当に神さまに罪赦され、受け入れられ、
神さまとの和解、平和に入れられ、その祝福に入れられていることを、
単に頭だけの観念によるだけでなく、その目で見、鼻でかぎ、手で触れ、舌で味わって体験するのです。
神さまが自分の罪を贖ってくださったことを味わいます。
神さまが自分の罪を寛大に赦してくださったことを味わいます。
神さまが自分を受け入れてくださったことを味わいます。
自分を喜んでくださっていることを味わいます。
家族としてくださったことを味わいます。
神さまが自分を祝福してくださっていることを味わうのです。

しかも、それを最高においしい料理を食べながら味わいます。
難しい理屈抜きで、単純においしいと思う人間の本能に訴えて味わいます。
最高においしい料理を味わうことで、神さまの恵みを味わいます。
家族や隣人と共に和やかに鍋を囲んで楽しく宴会することで、
神さまに愛されている喜びを、心から体験して実感するのです。

「和解のいけにえ」の「和解」と訳されている「שְׁלָמִים シェラミーム」は
「完全な、傷のない、安全な、健全な、調和ある、平和な状態」を意味します。
神さまにこよなく愛され、受け入れられている、
そういう「平和」な状態を意味する最も適切な表現は、まさに食卓を囲む風景と言えます。
なぜなら、私たちは、余程親しい間柄でなければ他人と食事することはないからです。
恋人同士とか同じ家族であるとか本当に親しい間柄でなければ共に食事することはないでしょう。
ましてや自分の家に招き入れて食事を振る舞うような間柄は、家族かあるいは家族同然の付き合いとすることができます。
全然知らない赤の他人や憎い敵を自宅に招き入れることはまずありえません。
このように、**共に食事をする**ということは、
家族同然に親しい間柄であり、お互いの間が仲の良い平和な状態にあることを意味します。
ですから、神さまに愛されていることを表すのにこれ以上の適切な表現はありません。

神さまは、
罪贖われた私たちを
ご自分の家の祝宴に招き、歓迎してもてなして、
私たちを慰め、励まし、喜ばせて、私たちを強めてくださいます。
「和解のいけにえ」によって、神さまは、私たちのいのちを支え、私たちを養い、生かしてくださるのです。

イザヤ書 25 章では、世の終わりに、神さまがとこしえに死を滅ぼされる時、
**「万軍の主は、
この山の上で万民のために、
あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、
髓の多いあぶらみとよくこされたぶどう酒の宴会を催される」**（6）とあります。

これを受けて、イエスさまも、天の御国を「盛大な宴会」や「婚姻の祝宴」に喩えました（ルカ 14:15-24）。
神さまは、「ご自分の家」で、すなわち「天の御国」で、私たちを豊かに養ってくださるのです。

それをあらわすのが、旧約レビ記の律法で言うところの「和解のいけにえ」ということになります。
つまり、神さまは、「和解のいけにえ」によって、ご自分の民を慰め、励まし、その信仰を力づけてくださいます。
「和解のいけにえ」によって、神さまは、私たちのいのちを支え、私たちを養い、生かしてくださるのです。
「和解のいけにえ」は「天国の交わり」をあらわしています。
「永遠のいのち」に入れられたことをあらわしています。
「天国の宴会」です。
喜ばしく、楽しい、「天国の宴会」です。究極の祝福です。

以上、「罪のためのいけにえ」、「全焼のいけにえ」と「穀物の捧げ物」、「和解のいけにえ」について見てきました。

これらささげ物の順序は重要です。

まず「罪のためのいけにえ」、次に「全焼のいけにえ」と「穀物の捧げ物」、そして「和解のいけにえ」です。

これを言い換えると、

まず「罪の贖い」があって、

次に「献身」があり、

そうして永遠のいのちの「平和」に入れられる、ということになります。

神さまの恵みにより、

キリストの身代わりのいけにえにより罪贖われて罪赦された者だけが

喜びと感謝をもって神さまに自らの人生を献げて生きることができます。

そして、自らの人生を神さまに献げた者だけが神との交わりに入ることができるのです。

私たちは「永遠のいのち」に入りたいと願います。

この地上の生涯に於いても神さまに祝福されていきたいと願います。

でも、「永遠のいのち」に入るためには、私たちは神さまに自らの人生を献げなければなりません。

神さまの祝福を受けるためには、私たちは神さまのために犠牲を払わなければなりません。

自分の人生を神さまに明け渡さずして、どうして神さまの平安の中に入ることができるでしょうか。

平安は神さまの中にあるのです。

イエスさまは私たちに祝福を約束されました。

でも、そこには必ず条件が伴います。

例えば、地上の生活に於いて、

「何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。」(マタイ 6:31)

「これらのものはすべて与えられる」と約束なさいました。

でも、それはあくまで「神の国とその義とをまず第一に求める」者には、という条件がつきます。

「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。

そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

また、イエスさまは、

この地上の生涯に於いて

「その百倍(の祝福)を受け、

後の世では永遠のいのちを受ける」と約束なさいました。(マルコ 10:30)

でも、それはあくまで

「わたしの名のために、あるいは福音のために、

家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者」という条件がつきます。

「自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、

わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」(ルカ 9:24)とも言われました。

つまり、永遠のいのちに入るのに必要なのは、神さまへの献身なのです。

神さまに自分の人生を献げることなくして、一体どうやって神さまとの交わりに入ることができるのでしょうか。ステパノは殉教して天の御国にいよいよ入る時、こう叫びました。

「主イエスよ。私の霊をお受けください。」（使徒 7:59）

イエスさまも十字架で息絶える時、こう叫ばれました。

「父よ。わが霊を御手に委ねます。」（ルカ 23:46）

私たちの人生を父なる神の御手に「委ね」て、私たちは永遠のいのちに入るのです。

天国に入ります。

神との交わりに入るのです。

神さまから祝福を受けます。

平和が来るのです。

それは、神への献身によって、です。

自らの人生を神さまに献げなければなりません。

そうしてこそ、初めて私たちは神との交わりに入れられ、天の御国に入ることができるのです。

でも、この話を聞いて、自分の人生を神さまに献げることに躊躇いを感じる人もいます。

神さまに「献身」するなんて、重荷で負担だと感じる人もいます。

それで、そのような人に必要不可欠なものは何か、それが「罪の赦し」です。

これは当たり前の話ですが、自分の罪が神さまに赦されていない人にとっては、神への献身は重荷でしかありません。

でも、自分の罪が本当に神さまに赦された人にとっては、神さまへの献身は軽くびきであり、当たり前のことです。

なぜなら、自分は元々あまりの罪深さに神の怒りを受けて地獄に落とされても然るべき者であったからです。

地獄に行って、終わりなく、永遠に苦しむことを考えたら、そこから救われたことは何という喜びでしょうか。

自分が神のさばきを受けて永遠の滅びを味わうべきところを、

「罪のためのいけにえ」なるキリストが

私の身代わりに十字架で死んで私の罪を贖ってくださったことを考えるなら、それは何という喜びでしょうか。

そうなれば、当然、罪赦された自分の人生を、喜んで神さまに献げようとするはずです。

本当に神さまに罪赦されているならば、そうするはずです。

つまり、以上をまとめると、

永遠のいのちに入るためには神さまへの献身が必要であり、

神さまに献身するには「罪の赦し」が必要なのです。

それで、

「罪のためのいけにえ」、

「全焼のいけにえ」と「穀物の捧げ物」、

そして「和解のいけにえ」という順序でささげられたのでした。

これらをささげ終わった時、主の栄光が民全体に現われました。

22. それから、アロンは民に向かって両手を上げ、彼らを祝福し、
罪のためのいけにえ、全焼のいけにえ、和解のいけにえをささげてから降りて来た。

23. ついでモーセとアロンは会見の天幕にはいり、それから出て来ると、民を祝福した。
すると

主の栄光が民全体に現われ、

24. 主の前から火が出て来て、
祭壇の上の全焼のいけにえと脂肪とを焼き尽くしたので、民はみな、これを見て、叫び、ひれ伏した。

罪のためのいけにえ、
全焼のいけにえ、
和解のいけにえをささげ終わった時、主の栄光が民全体に現われました。

そして、

「主の前から火が出て来て、祭壇の上の全焼のいけにえと脂肪とを焼き尽くした」のです(23,24)。

これは、神さまがささげ物を受け入れたことを意味します。

そして、幕屋に臨在なさいました。

つまり、幕屋を通して、神さまは彼らと共におられることを現されました。

神との交わりが開かれました。

天の御国が彼らの所に来たのです。

「民はみな、これを見て、叫び、ひれ伏し」ました。

アロンは祝祷を二度彼らに送りました。

一度目は一人で、

二度目はモーセと共に。

民数記 6:22-27

ついで主はモーセに告げて仰せられた。

「アロンとその子らに告げて言え。

あなたがたはイスラエル人をこのように祝福して言いなさい。

『主があなたを祝福し、あなたを守られますように。

主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。

主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与られますように。』

彼らがわたしの名でイスラエル人のために祈るなら、わたしは彼らを祝福しよう。」

私たちも同じでは？

礼拝に神の臨在があらわれるには？

献身～ 罪の赦し

信仰生活に神の臨在

罪の赦しと献身

その時に、「和解、平和、喜び、祝福、幸い」が 神の栄光を見る

そして、神の栄光をあらわして生きることができる

ここに集われたみなさん一人一人が、

「神が共におられる」、天の御国のような、恵まれた、幸いな人生を歩まれるよう祈ります。